

Newsletter

No.55

DECEMBER 2015



カレドニア(CALEDONIA)はスコットランドの雅名
その国花は薊(あざみ)

—伝承歌を研究すること—

アメリカ黒人霊歌にみる「表現」言説の壁と向き合いつつ

ウェルズ 恵子

African-American の歌詞研究は、はじめは当惑の連続だった。声の主がどんな人でなにを考えているのか、つかみようがないのである。たとえ歌い手はひとりでも、集団の声が地の底から湧くように聞こえる。自然と人間との区切りが不明確で、個人の魂と集合的な魂とが合流し、超自然と一体化してしまう。言い換えると、黒人歌では歌詞のベルソナが特定できないように高度な技術が用いられている。それをどう研究すべきなのかということが、私の関心の出発点であった。

意味やベルソナの重層性を、“Lost John”を例に説明しよう。「ロスト・ジョン」というのはある男のニックネームで、「ロスト」には「行方不明」という意味と「死んだ」「天国へ行けずに迷子になった」という意味がかかっている。1951年にテキサスの刑務所で採録された音源によれば、歌い手は姿の見えない若者(または少年)の声を聞き、むかし行方不明になったジョンだという。“Lost John”は逃亡に失敗した奴隷の歌で、19世紀には歌われていたものと思われる。この歌は酷い最期をとげた逃亡奴隷への追悼歌でもあり、逃亡を企てる者へのいましめの歌でもあったのだろう。それが20世紀の黒人刑務所でも歌い継がれ、歌詞は微妙に変化している。登場人物のジョンはもはや奴隷ではなく脱獄者で、殺害され川に死骸を晒されている。受刑者である歌い手は死人のジョンに「目を覚まして仕事を手伝ってくれ」と声をかけるが、歌の途中で歌い手とジョンとの区別が曖昧になり、「ジョンはどっちへ行くのかわからない」という繰り返しのフレーズが「俺はどっちへ行くのかわからない」という歌詞にすりかわる。歌い手は追われて死んだジョンに自分を重ね、さらに、逃げたいと切望する人々の声が歌い手の声に合体している。家畜に劣る扱いを受けた奴隷は、抑圧的な環境で真意は見抜かれぬよう細心の工夫を重ねて言葉を使った。憎しみや絶望といった意識も自己抑圧し、それでもにじみ出てしまう声をかくまいつつ逃がす文学的伝統が彼らの歌にはある。歌詞は聞き手をはぐらかす仕組みで、「歌い手の声はだれのものか」「真意はなにか」という問いは無化してしまう歌なのである。

黒人歌の実質的な収集は1863年に始まった。南北戦争中に南部に足を踏み入れた北部知識人らが黒人の歌に心を揺さぶられ記録を残したのである。代表的な資料は *Slave Songs of the United States* (1868)である。Thomas Wentworth Higginsonによる“Negro

Spirituals”(1867: *Atlantic Monthly*)は小さい記事だが、黒人霊歌というジャンルを作り黒人歌の聖化に影響が大きかった。以後20世紀中葉まで、黒人歌は宗教歌のみが尊重され、俗的な歌は公には無視されるか軽蔑されてサブカルチャー化した。しかしこの流れは、歌を通して元奴隷たちの人間的尊厳を強調したいヒギンソンの思惑通りでもあった。黒人歌の聖化が顕著に顕われた例に、黒人霊歌は逃亡奴隷に道を示す暗号だったという説がある。それは、黒人霊歌が元奴隷の苦難と悲哀の自発的表現だというデュボイス以来の言説との組み合わせで広く信じられているが、実は、暗号説は信憑性のない情報から発生している。にもかかわらず、黒人霊歌が逃亡の道筋を伝えるコードソング(暗号歌)だという(俗)説が生き続ける背景には、奴隷制に対する贖罪の心理や差別の歴史から感傷的に視点をずらしたアメリカ社会がある。また、現代の歌詞解釈者と同じコミュニケーション方法で奴隷が連絡を取り合っていたという前提が、暗号説を支えているのである。私たち研究者は、そうした複雑な事情を解きほぐしながらこの文化事象を観察したい。創作者のコンテクストが受け手の理解を超えている可能性に意識的でありたいと思う。

黒人霊歌暗号説を例として、民間伝承テキストに関する「表現」言説の多くは、表現する主体と受け取る客体との対面的な設定におけるメッセージ認知観に基礎があり、双方が自我ないしは人格を同じレベルで確立していることが論理や感情の共有条件となる。ところが起源の古い民間伝承では、言語動作が近代の個人的自我とは別の特質を見せることがある。したがって、近代西欧の主流認知システムと土俵を共有せずに発生したテキストは、西欧文学研究とは異なるアプローチで理解や評価を試みるべきではないだろうか。このとき参考になるのが、民間伝承に関わるテキストにいる4者の「作者」である。(1)伝承を担ってきた不特定多数の人々(歴史的コンテクストにおける作者)、(2)活字になるテキストを披露した伝承者(個人的コンテクストにおける作者)、(3)テキストの採取者と編集者(知的コンテクストにおける作者)、(4)記録された伝承を意味付け言説化した人々(文化還元的コンテクストにおける作者)。伝承歌は表出(appearance)のアートでもあり、表現を許されないか表現できなかった人たちが、他者の声を借り他者のことばを使い他者を演じ、自己を隠しつつ自己をにじませて楽しんだ芸術である。だ

断絶と存在

阿部 陽子

からこそ、日本語の話者が英語のテキストを研究することは、作品のコンテキストから一定距離を保てるのでむしろ有利に働く場合もある。すると、伝承歌の研究アプローチは以下のようになるだろう。1～3は個別にも複合的にも採用できる。(1)「伝播、拡散、受容(聴衆)、変容に関する研究」受容者の影響を考察するコンテキスト研究で、音楽の消費市場やメディア研究とも関わりが深い。歌の動的な側面、すなわち社会との関わりや機能で研究しようとするもの。(2)「発生と発生母体に関する研究」人間の心や行動、環境など、人間存在と歌の関係を考察する。人はなぜ歌うのか、個人や共同体にとって根源的によい歌とはどのようなものか、という問いを追求する。(3)「静的テキストと記録に関する研究」動くテキストの伝承歌を文字化して解釈を加え理解を深めようとするもの。文学研究であれば数あるバリエーションから特定のテキストを選んだ理由が明確化される必要がある。フォークローリステイックな研究もここに入り、歌の収集、記録、カタログ化の作業が含まれる。

メディアが流動化し音声言語の重要性が急速に増している現代には、伝承歌研究はさらに発展させる必要があると確信している。(立命館大学教授)

*大会の講演内容を講師にまとめていただきました。(編集部)

◆2015 年度/2016 年度本学会役員について

10月10日の総会で以下の方々が2015年度および2016年度の役員として承認されました(敬称略)。その後の役員会で分掌を取り決めました。

鶴野祐介、江藤秀一、加藤昌弘、金津和美、木村俊幸、小林麻衣子、先川暢郎、坂本恵、高松晃子、立野晴子、照山直子、中尾正史、中島久代、野口英嗣、松井優子、松下晴彦、三鍋昌春、宮原牧子、森川由美、米本弘一、米山優子

代表幹事：照山頭人

副代表幹事：中尾正史、米山優子

事務局：小林麻衣子

〒168-8626 東京都杉並区久我山4-29-23

立教女学院短期大学 小林麻衣子研究室内

会計および会籍：松下晴彦、森川由美

企画運営(大会、研究会、役員会、HP)：鶴野祐介、加藤昌弘、金津和美、小林麻衣子、先川暢郎、立野晴子、照山頭人、照山直子、中尾正史、野口英嗣

編集(学会誌、Newsletter、学術奨励賞)：江藤秀一、木村俊幸、小林麻衣子、高松晃子、中島久代、野口英嗣、松井優子、宮原牧子、米山優子

会計監事：木村俊幸、立野晴子

◆2016 年第 1 回研究会 開催日変更

日時：2016 年 1 月 23 日(土) 15:00～16:30

場所：拓殖大学茗荷谷校舎 E 館 601 教室

(東京メトロ・丸ノ内線 茗荷谷駅下車、徒歩5分)

発表者：有元 志保氏(静岡県立大学短期大学部)

論題：ウィリアム・シャープとフィオナ・マクラウドの作品にみる分身の変遷

スコットランドは実際には荒涼とした土地も多く、交通機関や店などがほとんど無い場所も多い。そのことを表しているのは映画「シェル」(Shell, 2013)である。ハイランド地方の車もまばらにしか通らない道路に面したガソリンスタンドに父と二人で暮らしている17歳の女性シェルは、高校にも通っておらず、病気の父を気遣うために出て行くこともできない。ある時、夜中に車で鹿にぶつかって車が動かなくなってしまった人が助けを求めてガソリンスタンドにやってくる。瀕死の鹿を父は殺し、それを保存し日々の食料とする。一方、鹿に車をぶつけたのはエディンバラからの旅行者で、全く別世界の人である。そこは、全くの見捨てられたような土地なのである。小鹿がその事故で死んだ母鹿を探しに来て、シェルと父親との親子の絆と同じように、親子の鹿も小鹿が母鹿を慕っていたことがわかる。しかしやがてシェルの父も悲痛な死を遂げて、シェルはヒッチハイクで別の土地へ移動する。しかし、そこには希望があるようには見えない。

イアン・クライトン・スミス(Iain Crichton Smith, 1928-1998)の『マード』("Murdo")の主人公は作家になるという目的で銀行を辞めて全く仕事をしていない。書けない作家のために寄付金が必要だと思っていて、「まだ存在していない本は、存在している本よりも良くありつつある」と主張し、図書館員に「この部屋が存在してない本でいっぱいだったら、あなたの仕事ももっと楽だっただろう」とさえ言う。

ブライアン・マケイブ(Brian McCabe, 1951-)の『子供たちのことではなくて』("Not about the Kids", 1993)では、夜に家を飛び出した男性が妻に電話をかける。男性は妻と喧嘩になり車でファイフという町のバブにきていた。バブから出ると男性は、自分が見ている屋根の軒先にツバメの巣があることを想像する。バブでは誰かがツバメの巣は唾でくっついて巣ができていたのだという話をしていた。「別居の脅威があるからこそ二人の愛情は続くことができる」と、男性は妻に言う。

同じくマケイブの『もう一人のマコーイ』("The Other McCoy", 1990)では、細々とコメディアンをしている男性が死んだと噂され、実際には生きているその男性は幽霊のように街へ戻ってくる。男性は、「Scotland is a state of mind」と、何度も自身に言い聞かせ、戻ってきた時に仲間にも言う。主人公は、コメディアンとはいっても、一時だけの仕事である。パートナーである女性は、彼が死んだと、彼の勤務先であるテレビ局に電話する。一方で、彼は街を歩いているので、読者にとっては、街を歩いている彼が幽霊なのか、ドッベルゲンガーなのかと思う。物語を読むに従って、彼女が噂を信じて、彼を死んだことにしたということがわかる。死んだという噂があつてから、実在の彼が姿を見せるまでの1日の話である。結婚もしていない、仕事もしていない、何者でもないマコーイは、この世に存在さえしていないことにされてしまう。しかし、何者でなくてもマコーイは確かに存在している。

“Scotland is a state of mind.”スコットランド人ではないが、この言葉でスコットランドへ引き寄せられる自分に納得する。日本からスコットランドへ行くのは経済的にもそう容易くないが、スコットランドで過ごした「時」は常に自分の心の中に存在する。

(拓殖大学)

皆様のご要望にお応えして今号から文字を大きくしました。(編集部)

◆2015 年度全国大会報告

2015 年度の大会・総会は日本スコットランド協会の協賛のもと、2015 年 10 月 10 日 (土) にキャンパスプラザ京都 第 2 会議室で開催された。開会式では、櫻井雅人代表幹事、NPO 日本スコットランド協会 清家久美子理事にご挨拶いただいた。つづいて、長田恵子氏「ジョージ・マクドナルドの『北風のうしろの国』とケルト航海譚について」、高橋誠氏「権限委譲後のスコットランド政治と移民政策と世論」の研究発表が行われた。その後、総会が開催された。午後からは、ウェルズ恵子氏による講演「—伝承歌を研究すること—アメリカ黒人霊歌にみる「表現」言説の壁と向き合いつつ」が行われた。黒人音楽の音声資料を交えながら、表現[expression]と表出[appearance]の差異や、作者の重層性(4重構造)をめぐる、大変興味深い話が展開された。休憩を挟んで、シンポジウム「スコットランド民謡の越境性と土着性をめぐって」が行われ、コーディネーター(鶴野祐介)による趣旨説明の後、高松晃子氏「音楽文化の越境と定着」、櫻井雅人氏「Auld Lang Syne は世界を巡る」の両報告、これらに対するウェルズ恵子氏のコメント、そしてフロアからの質疑応答と、濃密な時間があっという間に過ぎていった。最後に、大会幹事の鶴野より閉会の挨拶があり、30 名近い参加者を得て開催された日程を無事終了した。今年度大会開催にあたり、関係者各位には多大なるご協力を頂きました。深く感謝申し上げます。

(鶴野 祐介 記)

◎研究発表要旨

「ジョージ・マクドナルドの『北風のうしろの国』とケルトの航海譚について」

長田 恵子

スコットランド アバディーンシャー・ハントリーで生まれたジョージ・マクドナルド(1824-1905)は、ファンタジー文学の創始者のひとりとして位置づけられている。また、グレンコー谷の生き残りのケルト系の子孫とされ、厳格なカルヴァン主義の家庭に育ち、牧師となるが異端的とされ解雇される。しかし彼の作品は、後の C.S.ルイスやトルキンらに大きな影響を与えた。

本発表では、19 世紀の科学万能主義とキリスト教との葛藤の中で、マクドナルドが、ケルトの民間伝承や神話を作品の中に取り入れることによって、既存のものに代わる新しい宗教的風景を創造しようとし、またダンテ『神曲』の中にある「キリスト教的な世界」との比較により「北風のうしろの国」とは、どこをイメージして作り上げたのかを考察した。マクドナルドは、ケルト民族が異教のキリスト教を柔軟に受け入れ混淆してケルト系キリスト教を作り上げたように、ファンタジー文学の中で、キリスト教的教義に、ケルト神話の妖精の世界観を混淆することによって、彼独自の世界観を作り上げたのである。マクドナルドは、『神曲』の中の「地上の楽園」と、「北風のうしろの国」が同じ場所であることを暗喩した。そこにはマクドナルドの形而上学的、神話的装置が働いている。19 世紀において弱体化したキリスト教的死生観の中に、マクドナルドはケルトキリスト教的地上の楽園を混淆することで、自らの死生観を作り上げたのである。(日本女子大学大学院)

研究ファイル

「使い回しの商品」

川畑 彰

人が 2 人寄れば社会が成立する。友好的であれ、敵対的であれ、個人の日々の営みは絶えず他者とことばを交わすことで維持、推進される。そして永遠の静寂の間隙に一瞬の生を享けた個人は、その証を記憶や種々の刻印として留める。また作家の書記媒体による虚構は現実社会の卓抜な模倣・反映であり、われわれの日常の言語使用を活性化させる。

いま筆者は 2 つの台詞を思い起こしている。1 つはあまりにも悲惨な人間の状況に喜劇性を彷彿させる『リア王』からで、2 つは力強い人物にも無縁でない傷つきやすさを示唆する『じゃじゃ馬馴らし』からである。前者はリアの発する「あそこにいる裁判官があそこにいる卑しい泥棒をののしっている。…二人が所を替えれば、もう、どっちの手にあるか当てっこする子供の遊びも同じだ、どっちが裁判官で、どっちが泥棒か、お前にわかるか?」というもので、後者は無名に近い人物による「だが、冬ってやつは男も女も獣も大人しく飼いやつらしまうんだ、だろ? だからすっかり大人しくなっちゃった、旦那も、新しい奥さんも、この俺もだ、なあ兄弟」である。前者は王でありながら道化と化した言辭で自身と他者の極限の窮状を訴え、後者は主筋の人物(たち)が置かれた状況について諺を引用してさりげなくコメントする。いずれも言わば民族社会に属する人物による散文が、劇中の主要人物が積み上げた物語を絶妙に異化する。

多くのシェイクスピア劇では悲劇、喜劇を問わず、主体的な個人の生き方、考え方が劇世界を発動、進行

させるが、同時に主体的個人はそれ自体では何とも儂く、脆いものであるとの認識が根本にある。第 1 の子供の遊び(ハンディ・ダンディ)に顕著な二重の‘play’意識がその認識を後押しする。「遊びの反対は真面目じゃない。…遊びを奪われた世界というのは死の世界である」(小野正嗣)が、遊びの感覚は「生と死を真っ向から対立するものではなく、一方が他方を織り込む継ぎ目のない衣」(G.M.ブラウン)へと転換する。

文学テキストは豊かな言語使用が交響する宝庫である。またシェイクスピアが典型例であるように、作家は作品の骨組みや主題の多くを種々の先行する素材(プリテキスト)から得て、その膨大なテキスト群が読者、批評家から方言を引き出す。ここで重要なのは、種々のテキストの相互関連性は、当事者間に遊戯的想像力豊かな予備的判断としての「プリテキスト性」(pretextuality)が介在して初めて創造的に深化することである。

先のブラウンは死の数日前(1996 年 4 月)のエッセイの末尾で次のように述べた。「作家にひとつ留意しておくことがあるとして、それは読者に対して常に使い回しの商品(second-hand goods)を提供しているとの自覚である」と。ブラウンのテキストの創造性は、オークニー諸島の伝統・伝承(プリテキスト)についての「遊び心」たっぷりの「使い回し」から生まれた。詩人としてのその手法は徹底した詩(生)と沈黙(死)の関係についての探求(interrogation)であり、結果として読者(audience)は詩人(singer)が歌う多様な「詩的可能性」(poentiality; H.G. Widdowson)を享受する。その可能性の類推が「プロスペローの島」や、わが「日本列島」にどのような及ぶのか、筆者は当面、不十分ながらその「研究ファイル」を綴ろうと思う。(お詫び:文中の出典は省略)

(芦屋大学)

「権限委譲後のスコットランド政治と移民政策と世論」

高橋 誠

2014 年 5 月に実施された総選挙では 1 議席の獲得に終わったが、近年、反移民を掲げるイギリス独立党が台頭している。その台頭に影響され、2010 年時に比べ、2015 年総選挙時のマニフェストで提言された保守党の移民政策も硬化し、移民政策の政争の道具化が見受けられるようになってきている。しかしながら、スコットランドの政党政治界では移民政策に関して比較的前向きなコンセンサスが存在しているとされる。今回の発表では、まず、そのコンセンサスの背景にあるであろう要因を提示した。

発表の後半では、以下の疑問に対する仮説的な要因を挙げた。その疑問とは、イングランド同様、スコットランドでも移民受け入れにネガティブな世論が存在しているにもかかわらず、何故スコットランドでは抑制的な移民政策を掲げる政党や急進右派政党への投票は比較的少数に留まっているのかという疑問である。最後に、スコットランドが独立した場合に起こりうるスコットランド政治や移民政策の変化について言及した。(慶應義塾大学大学院)

◎シンポジウム「スコットランド民謡の越境性と土着性をめぐって」

「音楽は世界の共通言語」と言われるが、あらゆる音楽が世界中の人々に共通する感覚を与えるわけではない。ある歌が、特定の社会の人びとには郷愁や安らぎをもたらす一方で、別の社会の人びとにはエキゾチックな感覚を与えたり、騒音として拒絶感をもたらしたりすることもある。いわゆる芸術歌曲であれば、たとえ人びとに違和感や拒絶感を与えるような作品であってもコンサート等を通して他の社会へと「越境」する可能性はあるが、伝承歌の場合、それはまずあり得ない。「越境」が可能となるためには、伝えられた先の社会の人びとが、その歌を受け容れ、自分たちの社会に根づかせる、いわゆる「土着化」の過程が必要となる。このような「土着化」されたテキストを、スウェーデンの説話学者フォン＝シドウは「オイコタイプ」と呼び、伝承説話の越境性と土着性を論じたが、伝承歌にも一定の妥当性を持つ理論と見なされる。

はじめにコーディネーター(鶴野)から本シンポの趣旨と「オイコタイプ」理論について説明した後、高松晃子氏の「音楽文化の越境と定着」と題する、テレビ番組出演時の楽屋裏話を含めたご報告、次に櫻井雅人氏の「Auld Lang Syne は世界を巡る」と題する、この歌の歌詞およびメロディが越境し土着化した具体例の、音声資料によるご報告の後、ウェルズ氏よりバーンズとフォスターの異同性やアメリカ合衆国におけるスコティッシュ・アイリッシュ系の口承文化とアフリカン系のそれとの相互補完性に関する興味深いコメントをいただくとともに、フロアからも貴重なご意見やご質問をいただいた。(鶴野 祐介 記)

「音楽文化の越境と定着」

高松 晃子

明治時代の日本に唱歌の楽譜として出現した数曲のスコットランド民謡は、学校教育において実践されたが、その後定着したと言える曲は少ない。《蛍の光》や《故郷の空》が例外的に生き延びられたのは、卒業式や信号機、替え歌といった具体的な文脈の獲得に成功したからであろう。これらは、スコットランド出自であることが忘れられたり、スコットランドと日本の

親和性を示すエピソードを再構成・再生産したりすることで、土着化に至っている。後者の例として、報告者が出演したテレビ番組「題名のない音楽会」を取り上げ、報告者が発言した内容が番組の意図に即して修正された過程を、具体的に示した。そこには、事実関係をあいまいにして論点を単純化し、日本人とスコットランド人、あるいはそれぞれの音楽の親和性を強調して、「懐かしさ」に回収する構造を見ることができ。文化伝達の形態が多様化する中で、過去を一面的なイメージに再構成して再生産するしくみも依然として継続しているのである。(聖徳大学)

「Auld Lang Syne は世界を巡る」

櫻井 雅人

「蛍の光」の原曲である“Auld Lang Syne”は日本以外の国々でどのように受け入れられてきたのかを多くの録音をまじえて報告した。読むための詩としては多数訳されたが歌える訳詞は案外と少ない。日本にも訳詞版はあるがほとんど知られていない。大きく分けて同じ曲と、訳詩に基づく新しい作曲がある。後者にはロベルト・シューマン(ドイツ)、ティホン・フレンニコフ(ロシア)の作品がある。替え歌版では別れを主題にしたものが多い。映画『哀愁』に挿入された「別れのワルツ(Farewell Waltz)」は、日本では閉店の音楽になったが、ヨーロッパ諸国などでは新たな歌詞が付けられて流行した。また、愛国歌謡・国歌・スポーツの応援歌・賛美歌・唱歌などにも使われた。外国に伝えられたのはたいていが旋律のみで、演奏スタイルやコンテクストも異なる。文化を超えて「越境・土着化」したのは曲のほうであった。(一橋大学名誉教授)

◆NPO 日本スコットランド協会(JSS)

◇スコティッシュ・デイ東京

日時: 2月11日(木・祝) 12:00 ~ 15:00

場所: 日本外国特派員協会 (TEL:03-3211-3161)

会費: 会員 5,000 円、一般 6,000 円、大学生 3,000 円

◇スコティッシュ・デイ神戸

日時: 2月20日(土) 12:00 ~ 15:00

場所: 神戸倶楽部 (TEL:078-241-2588)

会費: 会員 4,000 円、一般 5,000 円、大学生 3,000 円

◇「まろやかスコットランドの旅」参加者募集

協会ならではのコース、詳細はお問合せください。

期間: 2016年3月31日(木) ~ 4月9日(土)

費用: 約 35 万円

申込締切: 1月11日(月・祝)

問合せ・申込み: NPO 日本スコットランド協会

TEL/ FAX: 03-6380-5256

E-mail:

協会ホームページ: <http://www.japan-scotland.jp/>

日本カレドニア学会 Newsletter 第 55 号

2015 年 12 月 22 日発行

編集発行人 日本カレドニア学会代表幹事 照山顕人

<http://www.ne.jp/asahi/caledonia/jcs/>

事務局 〒168-8626 東京都杉並区久我山 4-29-23

立教女学院短期大学 小林麻衣子研究室

Newsletter 編集担当 江藤秀一、野口英嗣、米山優子

(連絡先) 〒305-8571 つくば市天王台 1-1-1

筑波大学 江藤研究室 TEL 029-853-4127